

カントの第一アンチノミー

第一部と先驗的觀念論

相原信作

此處に公けにするのは二年前大學卒業の際に書いた卒業論文である。自分は本誌への寄稿の責に任ずるのに、かゝる未熟なる舊稿を以てすることを苦痛に思ふ。しかし乍ら、大學卒業後私に與へられた可成多忙な仕事と私の經驗した雑多な思想生活は、學問的に純粹なる特殊問題への没頭を許さず又かゝる目的の爲めに相當の用意を以て筆をさるゝことのさう容易に實現できるものに非ざることを悟らしめた。それで一先づ此れを以て編者への約を果したく思ふに至つたのである。

哲學の重要な職分の一を科學的認識の限界規定に置いたカントの思想には、不朽の眞理が含まれてゐると思ふ。科學が認識の無限の進歩、科學に依る人間生活の無限の向上發展に就て語るさき、人は此の科學の確信の全き肯定の中に、同時に、科學そのものの限界の理解を含めなければならない。科學の丘上に亂舞すると共に、時には丘端に來つて其れをめぐる實在の深淵の如何に深きかに驚かなければならぬ。眞正なる哲學的論理は人を其處に導くであらう。哲學は實在そのものを抽出するものではない。それは實在の直前にまで人をつれてゆく役目のものである。

のである。

カントに於てかくの如き役目を演じ、彼の批判哲學の一起點となつたものは、第一批判の先驗的辯證論に掲げられた純粹理性のアンチノミーである。それは辯證法の研究に取つても不可缺のものであり、單に敘述の美しさから云つても惹きつける多くのものを持つてゐる。しかし私が此小篇に於て第一に念置したのは、科學的認識の限界の自覺に導く論理としてのアンチノミーを明かにすることであつた。かゝる限界の自覺を介してのみ哲學は、其目的たる世界の眞實相に面することが出来るのであると思ふ。自分は、此多くの點に於て缺陷を有する小篇がカントの本文に就ての研究の一助ともなるならば、甚だ幸福である。

(一) アンチノミーのコペルニクス的

轉回に於ける意義

思想は抽象的なものより具體的なものへ進む。

抽象的なもの丈しか氣付かなかつた時にも具體的なものは働いてゐる。具體的なものがあつて抽象的なものもあり得たのである。前者は後者の根原である。思想の發展は根原が背景に出て來ることである。

今哲學の發展を考へて見る。其處に於て實在に就ての考が發展するとは先に實在と考へられたものが後で實在と考へられるものゝ一面的抽象であつて後者は前者の具體的根原であるといふ事が明になることである。

かゝる場合に抽象的立場に止ることを許さないやうに迫るものは、抽象的立場にあつて實在を考へんとする時に起る矛盾である。實在の學といふ前提の中に具體的根原を考へるといふことが求められてゐる。此處で考へられるものは、すべて根原としての諸條件に適合すべきことが要求せられてゐる。然るに今此處で考へられるものは、その

條件を満足することが出來ない。此時に此矛盾は思想を發展せしめずにはをかない。

カント前の形而上學とカントに依つてその基礎を置かれたそれ以後の形而上學との間にはコペルニクスのと呼ばれる發展がある。カントは古き形而上學の矛盾を自覺する事に依つて新しき世界への途を發見したのである。然らばカントを驅つて新しき形而上學の基礎付けに到らしめた古き形而上學の矛盾は何であるか。無限と自由とに關するアンチノミー此れである。⁽¹⁾私をして獨斷の微睡より先第一に目覺めしめ理性の假現的自己矛盾と云ふ耻辱を除かんとため理性其者の批判を爲さしめたのは此れであつた。⁽²⁾人間は掩ふべからざる規範意識の故に自由がなければならぬ。實在は此を限局する何物もあり得ざる故にそれ自身は無限でなければならぬ。我々はすべての哲學に向つて自由や無限を必ず滿さるべき要求として掲げることが出

來る。

「カント前の哲學は唯理論たると經驗論たるとを問はず共に一樣な獨斷的豫想に立つ。自然科学の器官たる悟性を尊重し、悟性に依つて認識せられるものを實在なりと考へたことこれである。悟性に依つて認識せられるものは結局「物」である。時間空間の世界である。カントは時間空間の世界を認識主觀を離れてそれ自身成立する物自體なりとする此立場を超越的實在論と呼んだ。先の哲學への要求は果して此處で満足せられるであらうか。時空の世界は自由を容れてそれ自身無限であり得るであらうか。否！若し此立場にあつて此事を主張せんとすれば反對の主張は忽ち此を排棄するのである。忽ちアンチノミーに陥るのである。カントは此矛盾を自覺することに依つて先驗的觀念論への途を開き、更に自由なるものこそ無限なる實在であるといふ輝かしい思想への展望を開いた。

先に實在と考へられた現象界は後者の一面的抽象として見做されることに依て矛盾を離れ得た。本論文に於ては時間的世界を實在と考ふれば到底實在無限の要求を満し得ざることを示すことに依つて現象の先驗的觀念性を論證するものとして第一アンチノミー第一部を研究し、時間的なるものが最後の具體的根原として止るを得ざる所以を學び時間的なるもの、無限性は只先驗的觀念論のみ能く此を基礎付け得るを知り、最後に觀念的抽象なるもの、根抵に當然豫想せらるゝ無限なるべき具體的實在は如何なる方向に求めらるべきかをカントの示唆に従つて考へ度い、アンチノミーのロペルニクスの轉回に於ける意義の一端に觸れ度いと思ふ。

(1) B. Erdmann, Reflexionen Kants zur Kritik der reinen Vernunft, Einleitung „Die Entwicklungsperioden von Kants theoretischer Philosophie“ に依る

(2) Kant, An Christian Garve 21. Sept. 1795

(二) 第一アンチノミー第一部を

胚胎する獨斷的實在論

時間的世界が實在と考へられ易きは勿論である。カントは空間の現象性を承認する人も時間の實在性を主張して止まないことを語つてゐる。⁽¹⁾「時間の現象性は此に對して(空間の現象性に對して)甚だ稀に主張せられたものであり徹底することの甚だ困難なものである。それは直ちに精神的狀態及び其活動の連關は空間的關係を現はすことは無いが徹頭徹尾時間的關係を現はすといふ最寄の批難に出會ふのである」⁽²⁾。然らば暫く時間的關係を實在とし物自體として見やう。世界を時間的存在の堆積として考へて見やう、此時には如何なることが起るか。此處で無限なるものへの要求は滿され得るか。

時に於て在るものはすべて流れ去る。現在は悠遠な時間の流れの一抹に過ぎない。世界は限り無

き時を重ねて現在に至り現在は果知れぬ過去を負ふ。カントの語を以てすれば過去は被制約者たる現在の先行的制約である。過去の過去はそのまた制約である。地球はもと太陽を打つて一丸とした星雲より派生せるものである。星雲の前には何が在つたか。その前には?この制約系列は一體無限であるのかどうか。被制約者に對して制約を求め求めて制約系列の無制約的全體に達せずんば止まじとするのが理性である。しかし經驗科學は經驗を離れざる故に此無制約的全體を捕へることは不可能である。一體制約系列は完結するものか、世界に始が有るのかどうか、此必然な問しかも科學の解き得ざる間に形而上學が其本來の問題を發見し、上段より解決し去らんとするのは當然と云はなければならぬ。既に過去系列は實在したのである。然らば其は無限の時に互つて存在したのであらうか。或は虛無より初つたのであらうか。

時間的世界を唯一の實在とする時には、其を限局するものゝあり得ざる故に、其は過去に於ても無限に在つたのでなければならぬ。しかし内に發展の機を藏して外に能く此をふせぐものゝ有らざるものこそ無限であり得る。過去は過去である限り死して動かざる堆積である。かゝるものは無限であり得やう筈がない。然らば此處に一個の不可思議を許容して實在たる時間的世界は何れかの時に虚無より生れ未來に向つて永遠無限なる發展を爲すと考へるとするか。しかしかゝる主張も時間が實在である限り到底保持し難い。始ありとも主張せられ無しとも證明せられる。而して此證明は有といふ時には無といふ時の矛盾を以てせられ、無といふ時には有といふ時の矛盾を以てせられてゐる、即ち *apagogisch* に行はれてゐるのであるから有でも不可、無でも不可といふ事を論證するものに外ならない。時間が實在なる限り有か無かでない

ければならぬのに有でもない無でもない。是第一アンチノミーの展開する事實である。先第一アンチノミーを述べやう。今便宜の爲めにカントがアンチテーゼとして後置した経験論の主張「世界は時間上始を有せず」より初めやう。時間的世界の超越的實在性を否定すべく樹てられたアンチノミー敎説の叙述に於て時間空間の世界即ち経験の世界の唯一實在性を固持するカントの所謂「純粹」経験論の自然に執るべき立場を初に述べるのは論の目的に不適當だとは思はれない。事實テーゼを執るものは現象界のみの實在を信ずるものではないからである。⁽³⁾

(1) Kant Kritik der reinen Vernunft s. 91 (Phil. Kbh.)

(2) Windelband, Einleitung in die Philosophie s. 106

(3) Kant Kritik der reinen Vernunft s. 418 以下參照(Phil. Btbl.)

(三) 世界は過去時に關して無限

なりとの主張

「世界は時間上始を有せずして無限なり」カント

は此證明を次の如く述べてゐる。即ち「若し世界に始ありとすれば、始はその中に物の無かつた時間が先行する一つの存在であるから、その中に世界の無かつた時間即ち空虚なる時間が先行したの
でなければならぬ。しかし空虚なる時間に於ては何物の生成も不可能である。何となればかゝる時間の如何なる部分も其自身に他の部分に對して非存在の制約と相違する處の存在の何等の制約も持つてゐないからである。(たとへ世界が自分自身で又は他の原因に依つて成立すると假定しても) かが故に成程世界の中に於ては事物の多くの系列が始ることが出来るが世界自身は何等の始を持ち得ず従つて過去時に關して無限である。」

此證明に於ては世界の始を限る空虚なる時間を假にあるものとして、其處に於て何物の發生も不可能なる事を語る。次の「世界は空間的に無限なり」といふ證明は、空虚なる空間と世界との關係

は無對象と世界との關係である、何となれば世界は直觀對象の絶對的全體であり、世界を限る空虚なる空間は何等の對象でも無いからである、世界が空虚なる空間に依つて限られてゐるとは、それが何物に依つても限られないと云ふことである、と云ふ風に行はれてゐる。即ち空虚なる空間其者が直觀對象に非ざるの故を以て否定せられてゐる。此に倣つて空虚なる時間は何物も發生するを得ざるのみならず、それ自身現實なる直觀の對象ならざる故に凡そ有り得ざるものである、空虚なる時間即ち無を豫想せざるべからざる世界の始は不可能であると證明することが出来るやう。(カントもその可能を Anmerkung⁽¹⁾ に述べてをり又實際此に従つて證明を行つてゐる。)⁽²⁾ 經驗對象が實在である。無限である。即ち現在迄に無限の世界無限の時が經過し去つたのだ。限り無きものがあつたのだ。しかし一體あつたものが限り無きを得るであらう

か。經過し去つたものが無限であり得るであらうか。時間的現象のみの實在性を執る立場で無限なるものが過ぎ去つたと云へるであらうか。此立場にあつて此事を主張せんとすれば反對の主張は忽ち起るのである。此證明と同様の確實さを以て反對の主張が成立するのである。「世界は時間に於て始を有す」即ち此れである。

(1) Kant, Kritik der reinen Vernunft s. 393 (Phil. Bibl.)

(2) Kant, Über die Fortschritt der Metaphysik seit Leibniz und Wolf s. 118 (Phil. Bibl.)

(四) 世界は過去時に關して有限なりとの主張

「世界は時間に於て始を有す」其理由はカントに依れば次の如くである。

「世界は時間上無始なりとすれば各々の與へられた時點迄に永遠が經過した従つて世界に於ける事物の互に繼起する状態の無限の系列が流れ去つ

たのでなければならぬ。然るに系列の無限の無限たる所以は其が繼時的綜合に依つて決して完成し得ない點に存する。故に無限なる流れ去れる世界系列といふのは不可能である。従つて世界の始は其存在の必然な條件である。」

世界は時間上無始なりとすれば各々の所與の時點迄に事物の無限系列が流れ去つたと云はなければならぬ。しかし流れ去つたものは其限り繼時的綜合に依つて完成し得るものである。系列の無限の無限たる所以が繼時的綜合に依つて完成し得ざるものとすれば過ぎ去つたもの、繼時的綜合に依つて完成し得るものは無限ではあり得ない。過ぎ去つたものは必ず有限である、其始を有たなければならぬといふのである。

此證明は一見主觀的に綜合し統覺し捕捉し得る丈のものゝみ客觀的に存在したと云ひ得るものである、とするものであり其點で主觀的統覺の不

可能より客觀的存在の不可能を論斷せる僭越の上に立つてゐるやうに見える。此處から此證明に對する多くの非難が起つてゐる。

スミスは、此證明は其尤もらしさを流れ去つた (verfliesen) といふ言葉を完成するといふことゝ同義に用ひるといふ不當さから得たものだ……繼時的綜合に依つての句がカントの證明法に、要らざる主觀主義者の色彩を與へてゐると言ふ⁽¹⁾。シヨーペンハウエルは無限なる Regressus に倦める人間推理力の不完に歸し、單なる心理的主觀的根據に基くもの單なる Sophisma として排し去つてゐる⁽²⁾。ラツセルは無限は繼時的綜合に依つて「決して」完成し得ないといふ時、彼が恐らく正當に云ひ得るすべては、それが「有限の時間内」に完成し得ないといふことである、故に彼が事實證明してゐることは、精々若し、世界に始なしとすれば世界は無限の時間に互つて存在してゐたのに違ひな

い、と云ふことであると云つてゐる⁽³⁾。

勿論カントの證明は言葉足らずして多くの非難を容れる餘地があるであらう。併し見る者は彼の證明への「保證」⁽⁴⁾と、アンチノミーに托した厚き自信⁽⁵⁾と、其の齎した重大な結果との故に、輕々に其意を逸し去つてはならぬ。時間的實在捕捉への抗議と先驗的觀念論の一半を支ふる論理とが此處に潜んでゐるからである。

先の非難を考へて見やう。「主觀的に無限なる過去系列を盡し得ないと云ふことは客觀的に無限なる過去系列が存在すると云ふことを否定する理由とはなり得ない。主觀的に捕捉し得ずとも客觀的に存在し得る」と云ふのである。此非難は二様に解し得る。一は此を超越實在論的に解するのである。「即ち客觀界は主觀に依つて捕捉統覺されずとも其自身存在する。主觀の捕捉統覺の約束を超越して存し得る。」とするのである。他は此を先驗觀

念論的に解するのである。「客觀は主觀に對して超越的意味を持つてゐる。無限系列がたとへ外延的には主觀の捕捉可能を超えてゐても、其れは對象の有する意味として確立されてゐる。」とするのである。我々は此に對して答へ得る。一はカントに依つて正に啓蒙さるべき獨斷であり、他はカントと同じ立場であり、カントのアンチノミー教説の結論を形成すべきものであり而して其限りカントがアンチノミーの前提とした超越實在論的獨斷を無視した早急の批評である。何れも證明に對する批評として取るに足らざるものである。今一の非難を考察して併せて有始の證明を明にしよう。

カントが其中にアンチノミーを發見したのは超越實在論である。有限の主張も無限の主張も共に客觀を以て主觀に對して超越的に獨存する物自體なりとする獨斷に於て一致する。しかし客觀即ち此處では時間的世界が過去無限に存在せるものな

りや否やの間に對して、其れは二つに分れる。無限なりとするものと有限なりとするものである。無限系列は主觀に依つて捕捉し得ざるものなる故に、無始の主張者は必ず主觀に依つて捕捉し得ざるの故を以て無限系列の存在の不可能を證するに足らずと云ふであらう。かの非難は無始の主張者の非難である。無始の主張そのものである。無始の主張を以て有始の主張を覆さんとするものである。しかもアンチノミーのアンチノミーたる所以は、双方が同等の權利を以て成立つ點に存する。覆すと云はば双方同様に他を覆し得る所に在る。今證明の小前提は「無限系列の無限系列たる所以はそれが繼時的綜合に依つて完成され得ない點にある」と云ふ。此は證明の前提たる唯理論的見地の下に解釋されねばならぬ。繼時的綜合に依つて完成され得ないものとは換言すればその事實的存在が悟性に依つて理解し得ざるものである。綜合

捕捉統覺し得ざるものは即ち理解し得ざるものである。此意を敷衍して有始の證明を次の如くすることも出来やう。

「世界に始なしとすれば各時點迄に事物の無限なる系列が存在したと云はなければならぬ。例へば先行する時點A迄にも此に後る、時點B迄にも各無限系列が存在したと云はなければならぬ。然る時はB迄の過去はA迄の過去よりもA B間に起つた事件丈明に大である、しかも兩者共無限なる故に等しいといふことゝなる、しかし大にして而も等しと云ふ如きもの、事實的存在を悟性は理解することは出来ない。理解し得ざるもの、存在を許すことが出来ぬとすれば(唯理論の前提)世界の始は、世界の存在の必然な條件と云はなければならぬ。」

ボサンケは「無限系列は無限系列である限り我等が世界の事實ではあり得ない」と云ふ。我等の

對象構成の思惟は必ず部分の増減に依つて全體が増減することを要求する。部分が増減するも全體が何等變ずること無き如き系列を存在するとして定立することは出来ない。而して無限系列は實にかゝる系列なのである。「世界の始は虚無の存在を豫想せざるべからざる故に有り得ず、従つて世界は無始にして無限である。今迄に無限系列が存在したのである。主觀的に無限系列の存在が不可捉なるの故を以て其客觀的存在を否定することは出来ぬ。」と云ふか。此に對して同等の權利を以て云ひ得る。「世界の無始は無限系列の存在を豫想せざるべからず、故に有り得ず、従つて世界は有始にして有限である。今迄に經過したものは有限である。主觀的に虚無の存在が不可解なるの故を以て其客觀的存在の可能を否定することは出来ぬ。」と云ふか。此に對して同等の權利を以て云ひ得る。要らざる主觀主義者の色彩と云ひ、病膏肓に入れらるる主觀主義と云つてテリジス(有始の主張)を攻撃

するものはその同等の非難がアンチテーゼ（無始の主張）に妥當することに目覺めなければならぬ。相手の主張に向つて主觀的に存在不可解の故に客觀的存在の不可能を論斷するを得ずと注意する前に、自らが主觀的に不可解の故を以て客觀的存在の不可能を論斷してゐることを省みなければならぬ。自らの客觀的對象に就ての積極的主張には主觀的理解力を以てし、相手の行ふ主張への反對には主觀的理解力よりの客觀的對象の超越を以てする——自らの主張の爲めには主觀的理解力を肯定しなければならぬ、相手を駁する爲めには主觀的理解力を否定しなければならぬ、自らを相手に對して主張する爲めに同じものを肯定すると共に否定しなければならぬ。——此がアンチテーゼがテーゼと同様に陥る矛盾である。テーゼ不可ならばアンチテーゼも不可である。アンチテーゼ不可ならばテーゼも同様に可である。此

が時間的存在を實在であり物自體であるとする時に起るアンチノミーである。

- (1) Smith, A commentary to Kant's Critique of pure reason p. 483, 484
- (2) Smith, A commentary to Kant's Critique of pure reason p. 483
- (3) Russell, Scientific Method in Philosophy p. 157
- (4) Kant, Prolegomena S. 107 (Phil. Bibl.)
- (5) Kant, Prolegomena s. 158
- (6) Royce, The World and the Individuals 1. Series p. 557.
- (7) Russell, 前掲

(五)アンチノミーの適用せらるべき

獨斷一般

カントがアンチノミーで論じた世界は自然である。自然が過去無限なるか否かを論じたのである。しかし時間的なのは自然のみではない。自然に比して尙直接な實在と考へられる世界歴史や人格的歴史や記憶の指し示す生々しい經驗の世界は皆時間的存在の世界である。自然の超越實在性を否定するものも此の直接な世界の實在性を疑はないで

あらう。併し其れは果して眞の實在であらうか。

ウキンデルバントは實在を歴史的に考へる近世哲學の世界觀がカントの認識論に對して有する困難に言及して云ふ。「若し發展が人生及び宇宙の實在の本質として理性必然的に考へらるべきならば、其れと時間の現象性とは如何にして結合するか。

若し價値が實現に於てあり實現に於てのみ理解さるべきであるならば、時間を外にして考へられな
い生起は實在それ自身の本質的規定でなければならぬ。それは單に直觀の形式としてのみ妥當することは出來ない。」⁽¹⁾と、併し時間的に發展する歴史が果して實在なのであらうか。實在は必ず無限でなければならぬ。時間的發展、時間の生起は無限であり得るか。無限の過去より存したと云ひ得るか。過去が無限であると云ひ得るか。時間的な者のみを見て實在となす時は到底アンチノミーを免れることは出來ない。例へば意識現象の實在

を信する者は云ふであらう。「空間的外界は實在でない」と云ひ得るであらう。しかし此繼起する時間的内界は否定するを得ない事實である。冷、暖、悲、喜、見、聞、此一状態より他の状態への活動より他の活動へ絶えず轉化しゆく意識は否定すべからざる實在である。かゝる世界は始を有つて考へることは出來ぬ。始めは必ず何物も無き虚無を豫想する。しかし虚無が在るとは謬想である。何物もないものがあるとは自家撞着である。故に世界は無始である。過去無限にかゝる意識があつたのである。」と、此れカントのアンチテーゼと同様の主張である。その前半に於て轉化と云ひ虚無が不可解と云つて悟性を用ひ乍ら後半に於て悟性の理解を超越した結論を導く、理解し得るものは理解し得ざるものである、と主張するに等しい。

此矛盾は、實在を單なる時間的生起とする以上

に此を規定して、現在は必ず過去を負ひ、先なるものは必ず後なるものゝ中に保持せられ、即ち一瞬の過去を繰返し得ず絶えず發展し進化し成長するものとする時、即ち實在を歴史的發展とする時一層明に認められる。發展するものは無限の過去より發展し得るか。始なき發展といふことが有り得やうか。漸次に豊富に成るものは逆に考ふれば漸次に貧しく成るものである。無限に貧しくなつてゆくこと云ふ事は明な矛盾である。實在は無始來の發展であるといふのは、實在を一度發展といふ有限數的關係の下に入れ悟性に依つて理解し得るものと爲し乍ら實在は理解し得ざるものと云ふものである。甚だしき自己矛盾である。

即ち我々はカントのアンチノミーに依つてすべて時間的なるもの前後去來するものゝ實在性を排斥すべく促される。

無限の問題は人類の思索と其起源を同じくする。

無限なる實在を認識せんとはすべての思索の念願である。しかし人間の悟性は有限である。其は有限なるものしか捕捉することは出来ぬ。此處には深き辯理がある。若くして創造の無限を思ふて精神の高揚を嘆じたカントが此「哲學する者の十字架」を負ふて到達したものが先驗的觀念論である。

(1) Windelland, Prilichen Bl. 1. S. 163 (Nachhundert Jahren).
 (2) Cohn, Geschichte des Unendlichkeitsproblems im abendländischen Denken bis Kant S. 233

(3) Kant, Ueber die Form und die Prinzipien der sinnlichen und Verstandeswelt. S. 95 (Phil. Bihl.)

六) アンチノミー解決の鍵としての 先驗的觀念論

カントがアンチノミーの前提としたのは時間的對象に關する超越實在論であつた。實在は悟性に依つて理解し得、理解し得るものは即ち實在であるとする獨斷であつた。時間的なるものが實在であると考へられる限り其は無限に在つたとは云へ

ぬ。勿論有限なりとして止ることも出来ない。何れを執るも悟性は自己矛盾に陥る。悟性萬能の結果は悟性の自己否定に終らなければならぬ。然らば如何にすべきか。獨斷者流が己の主張を執つて動かす、懷疑家が悟性の無能を喜ぶ間に、批判哲學者は須くアンチノミーの前提其者を批判しなければならぬ。悟性的對象を實在とする前提其者を反省しなければならぬ。其が自然であれ、生物であれ歴史であれ意識の流れであれ、凡そ「理解し得る對象」「時間的關係に於て生滅するもの」を實在とする體系は窮極する所獨斷的宿命論的唯物的であると云つてもよいであらう。

「唯二つの體系があるみである。批判的と獨斷的」⁽¹⁾獨斷論をとつてアンチノミーに撞着せる者は批判論に趣かなければならぬ。Materialismusを出でて Idealismus に入らねばならぬ。Sein = Gedachtsein の自覺に深まらなければならぬ。カン

トの語を以てすれば、時間に於て直觀せらるゝもの、可能的經驗の對象はすべて現象に過ぎない、單なる表象に過ぎない、其は其等が表象せらるゝ如き變化の系列としては我々の思想の外に何等其自身基礎付けられた存在を持たない、其規定が時間に於ける種々の状態の繼起に依つて表象せらるゝ我々の精神(意識の對象としての)の内的感性的直觀さへ其自身存する眞の我ではない、此知られざる本質の感性に與へられた現象に過ぎない、のである。⁽²⁾

カントは斯く「アンチノミー解決の鍵」として先驗的觀念論を説いて後僞りの觀念論たる經驗的觀念論を警戒してゐる。經驗的觀念論は空間的存在を否定し乍ら内的經驗の現象を其時間規定諸共に實在だと主張する。此がアンチノミーに陥るべきは云ふ迄も無い。其は觀念といふものを實在とする點で獨斷論であり唯物論である。(Der Konsequ-

ente Dogmatiker ist notwendig auch Materialist.)⁽²⁾ 觀念論の觀念論たる所以は觀念が實在で無くして單なる觀念であり、此を否定し得る一層具體的なる實在の自覺の上に立つてゐる點に存する。此時此實在を個人的自我とすれば主觀的觀念論となる。個人的自我は觀念するもので無くて觀念に過ぎない。觀念を實在とする獨斷論であり觀念の意義を没し去つた唯物論である。前兩者は共に眞の觀念論とは云へない。其上或は時間のみをとつて空間を棄て或は總てを個人的自我の觀念とすることに依つて「説明すべきことを説明せざる」考へ方である。⁽⁴⁾ 眞の觀念論は説明すべきことを説明する先驗的觀念論でなければならぬ。超越的實在論を棄てゝ觀念論をとると云ふ時觀念論は必ず先驗的でないければならぬ。

- (1) Fichte, Grundlag der gesamten Wissenschaftslehre S. 41
(Phil. Bibl.)

- (2) Kant, Kritik der reinen Vernunft S. 438, 440 (Phil. Bibl.)
(3) Fichte, Erste Einleitung in die Wissenschaftslehre S. 15
(Phil. Bibl.)
(4) Fichte, Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre S. 77,
(Phil. Bibl.)

(七) 先驗的觀念論に依る自然界無始の基礎付け

自然は過去に關しても無限と考へられなければならぬ。科學者は自然に始ありとは云はないであらう。併し超越實在論は此事を基礎付ける事不可能にして、アンチノミーに陥ること前述の如くである。先驗的觀念論は先驗の名に相應しく自然科学の此要求を基礎付け無ければならぬ。説明すべきことを説明しなければならぬ。然らば此は如何にして可能なるか。

我々は先驗的觀念論に依つて對象は主觀の思想に過ぎず従つて其思惟に依つてのみ構成せられることを知つた。此を今の問題に就て云へば、超越

實在論が考ふる如く、過去は主觀の思惟の外に獨存するのではない。過去は思惟に於てのみ在る。

其は「經驗的思惟」が果に對して因を、被制約的後件に對して制約的前件を追ひゆく「溯源」に依つて

のみ構成せられる。此時此對象構成の經驗的思惟の背後には、かの自然數の系列に於て其範型を見

出す如き理性の無限が働く。理性は即ち被制約者Aに對して制約Bを求め此を得る時は直ちにBを被制約者と考へ此に對する制約Cを求めかくて無限に進む可きことを命ずる。即ち、部分「B C …」

「C D …」等が各々全體「A B …」を相似的に映寫するロイスの所謂自己表現體系たる無限系列を構成すべきことを課するのである。此は換言すれば溯源の到達する各々の項が無限なる前件に依つて制約せらるゝもの無限の過去を負ふものといふ意味を帯びて觀られてゐると云ふ事に外ならない。無限の過去は此過去溯源を指導する課題、對象がそ

れに於て觀られる意味として可能となる。而して常に全體として與へられる直觀時間こそ此思惟の無限なる活動を表徴する。(1) 然し此課題意味は、其基礎を經驗的心理的個人に對して先驗的論理的なる理性の本質に有するが故に、無限の過去は個々の經驗的心理的溯源を超越して存するか之如く考へられるのである。此課題、意味の先驗性、論理性を着目する事は重要であつて、過去が經驗的溯源の先に在りと考へられる所以を説明し得ざる主觀的觀念論に對する先驗的觀念論の優越は此處に存する。

即ち自然の無限の基礎付けば、物自體の立場より意味の立場に先驗的觀念論の立場に移ることに依つて初めて可能となる。

(カントは分割の場合には無限系列が在るか之如く見做し得る可能を説きながら、過去の際には理念の規定は只 *in infinitum* であつて *in infinitum* ではあり得ずとしてゐる。此に就て種々の解釋がある。コーヘンはカントの人間の祖を求めゆく例を引いて生物

學の理念を解してゐる。⁽²⁾ 成程生物學の理念は in indetinitum でなければならぬ。歴史や發展は此に反して初め有り云ふべきである。尙私が自然を in inditum をせる事は、カントとの關係に於てもつき立入つた議論を必要とするが、今は只私の到達した結論だけしか述べる事が出来なう。

(1) Kant, Kritik der reinen Vernunft S. 87 (Phil. Bibl.)

(2) Cohen, Kommentar zur K. d. r. V. S. 157 (Phil. Bibl.)

(八) 先驗的觀念論の豫想する實在の

求めらるべき方向

自然も生物も歴史も此變轉する意識現象すらも時間 に於てある。故に實在ではない、觀念に過ぎない。然らば實在は何であるか。無限を要請するも矛盾に陥らざる實在は如何なる方向に求めらるべきであらうか。

時間的存在の中最も具體的なのは意識現象である。自然や歴史は其抽象として理解せられるからである。具體的なものは必ず抽象的なものを含蓄しなければならぬ。然らざれば具體では無い。實

在は必ず觀念に對する實在でなければならぬ。然らざれば實在ではない。總て時間的なるものが其の抽象であり其の觀念である如き具體的實在は何であるか。此は須く前者中最も具體的なる意識現象を手掛りとして得られなければならぬ。

超越的實在性に死せるカントは何處に生きたか。

彼が變轉する意識現象を現象として否定せる時何が眞實としたか。單なる現象の堆積を越えて何物かがある。人間は知覺と感覺の受容性に關しては感性界に、しかし内に意識に直接なる (...unmittelbar zum Bewusstsein gelangt) 純粹活動 reine Tätigkeit に關しては叡智界に屬する。⁽¹⁾ 叡智的我が現象に働きかける其處に自由がある。自由なる純粹活動！カントに於て實在を求むるならば即ち此外は無い。我々は現象が其一面的抽象なる如きものが必要なのである。故に感性界を越えて彼が屢々呼びかけた叡智的世界は、其が感性界より超越的に考へられ

る限り今の目的ではあり得ない。初にあるものは Sinn でなくて Tat でなければならぬ。たゞ叡智的我が此現象界に働きかけてゐること自由であること、其に深き注意が注がれなければならない。現象界と叡智界とが各々その一面的抽象として見做される如き純粹活動！只其のみが求められてゐる所の具體的實在であり得る。我々はフイヒテが爲した如く、此カントの示唆に従つて彼が只道德との關係に於てのみ考へた所を一切のものに擴充すべきであらう。あるものはすべて自由であり、自由である限り、あることを知らなければならぬ。此處に於てこそ觀念論は其地盤を獲得する。

超越的實在が觀念に外ならずと知る、Sinn が、Godachsein に過ぎずと知ると云ふ事は、一體どういふ意味であらうか。其は只外なるものが内に入つて來たといふ事ではあるまい。超越的實在が内在的觀念となると云ふ事には尙質的な意味の變化

がなければならぬ。今迄は我とは無關係に獨存してゐると思はれた。其が我に依つて立つてゐる、我に知られることに依てあることが明となる、此主客の關係の自覺は自由の自覺に外ならない。カントが現象は只我の思想に過ぎずと云つた時、現象に主となつて此を役すべき自由の自覺があつたのである。カントが自然との關係に就て云つた事を我々は歴史や記憶の事實に關しても云はなければならぬ。觀念の觀念たる所は、其が其を否定し得るもの、それに對して自由であるものに於てあると云ふ事の外はない。觀念論には必ず自由なる實在の感じがなければならぬ。

我々は實在は無限でなければならぬと云ふ哲學に於て古き要請をとつて出發した。時間的なるものは此條件を滿さぬ。故に實在ではない。カントは實在を暗示する。其は純粹活動であると。然らば宇宙は純粹活動の無限の擴りなのであらう。併

し差別知は此を捕捉することが出來ない。捕捉し得るものは Objekt であり不自由である故に。然るに實在は Subjekt-Objekt であり自由である故に。前後と云ひ時間と云ふ、其は皆 Objekt を容れる器に過ぎない。前後と云つた時 Subjekt-Objekt は脱落して只 Objekt が残る許である。我々は諸の世界の先驗的觀念性を明にし、絶えず其等の實在への要求を否定し、其等が具體的實在の一面的抽象なることを證すると共に、眞に無限永遠なる實在を意識の眞面目に觀なければならぬ。第一アンチノミーの徹底は此を要求する。

(I) Kant, Grundlegung zur Metaphysik der Sitten S. 80

賞

報

退職せられたる本會委員

先に本會委員たる京都帝國大學教授文學博士狩野直喜氏及び同じく本會委員にして京都帝國大學教授文學博士西田幾多郎氏が華甲の壽に達せられ教授の職を退かれたので、本會の規約に従ひ、遺憾ながら、昨年本會の委員を辭せられる事となつたが、今回また京都帝國大學教授文學博士高瀬武次郎氏も昨年十二月を以て還暦の壽に達せられ、教授の職を退かれることゝなつたので、残念ながら近く本會委員の職を辭せられることゝなつた。

狩野、西田博士は委員御在職中、深厚なる御盡力を本會の爲に致されたのみならず、委員を辭せられた後も、本會の爲に間接に種々御援助を與へていたゞいてゐるのは本會として、實に感謝の辭さへない位であるが、高瀬博士に對しては委員御在職中に本會の爲に盡して下さつた多大の御功績